

<翻 訳>

言語は本能ではない

マイケル・トマセロ

伊 藤 忠 夫 訳

「生成文法 Generative Grammar」は、言語の獲得と使用の行動主義的理論の鋭い批判によって心理学者の注目するところとなった、そして実際、その批判は、認知革命において重要な役割を演じた (Chomsky, 1959)。しかし、「生成文法 Generative Grammar」と並んで——いわば、その上着の裾に隠れて——、生得主義の奇妙なブランドが現れた (Chomsky, 1968)。心理学者の観点からしてもっとも奇妙なことは、言語的生得主義を主張するに当たって、チョムスキーが人間行動と認知の科学研究において慣習となっているタイプの行動観察に頼らない、ということであった。その代わりに、彼は、もっぱら論理的議論に頼ったのだが、もっとも重要なのは、時系列的 sequential 結びつきにのみ基づく文法は多くの自然言語の現象を説明できないという彼の「証明 proof」であり、また、原理的には抽象的統語法は言語使用の特定の諸事例を観察することによっては学習され得ないという主張 (刺激の貧困 poverty of the stimulus から来る主張) であった。

「生成文法 Generative Grammar」が多年にわたって発達するにつれて、その実践者は、さまざまな経験的現象と関連づけることによって言語的生得主義を支える議論を強化し始めたのだが、その際しばしば、チョムスキーの元々の論理的主張の一部ではなかった言語構造の諸側面にも生得主義的仮説を拡大している。たとえば、独自の言語を創り出す耳の聞こえない子供、欠陥のある文法遺伝子を持っている人々、言語的「サヴァン savants」、

クレオール言語を「創り出す creating」子供、また、失語症の人々における選択的な言語欠陥といった広く喧伝された研究がある。これらの現象は、大衆向けと科学者向け両方のさまざまな異なったフォーラム誌で広く記述されてきた。しかし、大衆向けの報告は多くの場合、ひどい不正確な点を含んでいるし、科学的報告は多くの場合、「生成文法 Generative Grammar」の専門的術語のせいで言語学者でない人には近づき難い。

彼の新しい本、『言語本能：心はどのように言語を創り出すか』*The Language Instinct: How the Mind Creates Language* (1994) で、スティーヴン・ピンカーは、この状況を改善しようとしている。ピンカーは、この本の多くの部分をチョムスキーの理論の最近の拡大を要約し解説することに当てている。さらに野心的に、彼はまた、それらの拡大のすべてを、「生成文法 Generative Grammar」の専門的装置の深い理解を必要としない、言語的生得主義を支持する一つの一貫した主張にまとめようとしている。この本はきっと広く読まれるに違いない、というのも、それが一般読者を対象としており、また、多くの「今月の本 Book-of-the-Month」クラブのリストと、『ピープル』*People* と『今日のアメリカ』*USA Today* 誌のような出版物での書評によって広く大衆の目にとまっているからである。この本は、生き生きとした鋭敏な説明で楽しく書かれており、生計のために言語を研究しているすべての人々は、大衆が実際にそれを読み理解するような形で自分たちの独特の情熱へと大衆を案内していることに対してピンカーに感謝して良い。特に、この本は、スラング、「非標準的 non-standard」方言や他のさまざまな通常の言語的用法と変化から生ずる言語の墮落を非難する、言語の警察を自認する人々の規範から、科学者が行っている言語の記述的研究を区別するというすばらしく非礼だが大切な仕事をしている。

この本にかかわる問題点は、「生成文法 Generative Grammar」とそれに付随する生得主義が、論じられているほとんどあらゆる問題をめぐって現在荒れ狂っている猛烈な理論的および経験的論争が存在するという暗示のAの字さえなしに、確立した科学的事実として読者に提示されている、ということである。多くの言語学者が、実際には言語学者の大多数が、チョ

ムスキー流の「普遍文法 Universal Grammar」の存在を信じていないということは、この本の 430 頁のどこにも認められていないのである。だから、ピンカーは単に序章で、読者に「言語の科学 the science of language」を紹介するつもりであると述べるだけであり、それは素人と人文学者の混乱した無知な見解と対比されているだけである。彼はさらに、言語の科学においては、言語とは「われわれの脳の生物学的構造の明確に区別された部分で……特殊化した技能であり……情報を処理したり知的に振る舞うより一般的諸能力から明確に区別されて」(p. 18) いることが発見されていると述べている。言語学者によっては他の術語のほうを好むけれども、人間は蜘蛛が巣を紡ぐ本能を持っているのとほとんど同じように言語の本能を持っているのであるとずばり言うことで、この発見を捉える方を選ぶのだ、と彼は言う。彼はそれから、言語学者を言語は本能であるという「発見 discovery」に導いた研究の目もくらむようなごた混ぜを報告することへと進む。

しかし、言語は本能ではない。科学者と素人双方の共通の理解においては、本能とは、(a)行動的表現における相対的に型にはまった、そして、(b)一群の、種に典型的な経験から切り離されて育った個体の場合にさえも個体発生において現れるであろうような（たとえば、Birney & Teevan, 1961）行動的能力あるいは一群の行動的諸能力である。しかし、言語は、これら二つの基準のいずれにも微かにさえも当てはまらない。「言語 Language」は人類においては、統語法的慣習を含めて互いに根本的に異なっている数千の明確に区別される変異形を持っている、そして、個々の人間は、他の人間との数年間の特定のタイプの言語的経験の文脈において初めて、ある特定の言語を獲得することが出来る。すると、なぜピンカーは、本能という術語をそのように不適切な仕方で適用することにしたのだろうか。その答えは、ピンカーと仲間のチョムスキー主義者が「言語 language」という語で意味しているものがその語で通常意味されているものではない、ということなのである。彼らは、英語、トルコ語、あるいはワールピリ語のような特定の言語の話し手の伝達的慣習のことを意味してはいない。彼らが意味しているものは、「普遍文法 Universal Grammar」と

呼ばれるあるものであり、それは、彼らの見解ではまったく学習することの出来ない種に普遍的な言語の計算的 computational 構造である（これが「学習可能性理論 Learnability Theory」の中心テーゼであるとは、皮肉な話だが）と想定されている。

この短い論稿で、私は三つのことを主張する。第一に、私の主張では、多くの人々が生得的な言語モジュールについてかなりいい加減な形で言いふらしているけれども、これまでに提出されたそのようなモジュールの唯一の理論的に一貫した説明は、「生成文法 Generative Grammar」のものである——そしてその文法に、先験的に *a priori* 「普遍文法 Universal Grammar」の理論特異的な言語的構造が帰属するという。これが、しかもただこれだけが、ピンカーの「言語本能 language instinct」なのだとということ。第二に、私の主張では、言語とその発達のこの見解は、一貫してはいるけれども、間違っている。ピンカーの新しい本が生得的「普遍文法 Universal Grammar」のために提出しているもっとも重要な方面からの証拠のすべては、単に人間のゲノムにおいて運用される特定の言語的構造という形ではなく、言語に対する生物学的基盤が存在するのだという、言語獲得のより硬直していない生得主義的見解とも両立するということ。最後に、私の主張では、人間認知の他の領域における発達について知られていることとはるかによく調和するがゆえに、認知発達研究者にとって特に魅力的であるはずの代替となる言語理論あるいは一群の理論が存在するということである。

生得的とはどういうことか

誰の説明においても、人間が言語に対して生物学的に準備されている多くの仕方が存在する——たとえば、話し言葉に対して特殊化している音声＝聴覚的装置と並んで、一群の基本的な認知のおよび伝達の諸能力が準備されている——けれども、これらは、「普遍文法 Universal Grammar」とは何の関係もない。「普遍文法 Universal Grammar」は、「生成文法 Generative Grammar」として知られている言語の理論特異的な構成概念

である。そこで私は、ピンカーの仮説を「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説と呼ぶことにしようと思う、そうするのはその理論特異的な性質を明確に前面に出しておくためである。

この仮説を評価するためには、発達心理学者が「生成文法 Generative Grammar」について知っておかなければならない三つのことがある。その一つ目は、「生成文法 Generative Grammar」が数学と命題論理のような形式言語を自然言語のモデルとしている、ということである。この独特の比喻から、その理論における他のあらゆるものが流れ出てくるのである。もっとも重要なことだが、形式言語においては、統語論と意味論の間の区別は絶対的で、厳密に維持される、なぜなら、形式言語の全目的は、使用者が意味や解釈とは無関係にアルゴリズム的仕方で抽象的シンボルを操作できるようにすることだからである。「生成文法 Generative Grammar」は従って、同じその区別を厳密に維持する：そこで、統語論の自律性がそのパラダイムを定義する公準である (Lakoff, 1990), そして、それは、いかなる形においても言語の理解と使用の概念的あるいは語用論的側面とはかかわらない — かかわるのは、統語論にだけである (Chomsky, 1980)。その抽象性のために、形式言語は基本的には、いかなる行動的あるいは認知的領域にも適用して良いだろう、そして従って、言語に対する生成文法だけではなくて、生成文法は、夢、遺伝学、また音楽のような多様な現象に対しても書かれてきた (たとえば, Collado-Vides, 1991; Foulkes, 1978; Jackendoff, 1983)。

また、言語へのこの数学的アプローチから流れ出てくるのは、「ある言語の文法的文のすべて、そしてそれだけ all and only the grammatical sentences of a language」を形式的に記述する、しかもそれを出来る限り数学的にエレガントな仕方でそうする (いわゆる説明的妥当性; Chomsky, 1965) という「生成文法 Generative Grammar」の根本的目標である。そういうことで、もっとも形式的にエレガントなあるいは効率的な用語で言語を記述しようとする理論と、人間行動に表れているがままに言語を記述しようとする理論との間の区別は存在しない。つまり、エキスパート・システム (きちんと働くように造られる) と人間的シミュレーション

(心理的に妥当であるように造られる) との間の「人工知能 Artificial Intelligence」研究においてなされるものと類同的な区別は存在しないのである。その結果として、「生成文法 Generative Grammar」においては、理論の数学的エレガンスを増大させる新しい形式化は自動的に、何らの経験的実証を必要とされずに、「生成文法本能 Generative Grammar Instinct」の一部であると想定されることになる (Chomsky, 1986)。

発達研究者が「生成文法 Generative Grammar」について知っておくべき第二の事柄は、組合わせ combinatorial 数学のこの特定の形態が自然言語に初めて適用された時、それは英語だけに適用されたのだ、ということである。この歴史的事実は、この理論を形成するに当たって重大な役割を果たしてきた、そして、たとえば、言語的構成要素の直列的 serial 順序づけ (これは世界の諸言語において統語論的意義をほとんど持っていない) に対する過度の関心、変形および移動規則 (これらは言語によっては意味をなさないことさえある; 下記の言語普遍項に関する部分を見よ) への過度の関心、そして、文「主語 subject」のようないくつかの統語論的カテゴリー (これらは言語によっては存在しない; 言語普遍項に関する部分を見よ) への過度の関心を生み出してきた。多年を経て、「生成文法 Generative Grammar」はやっと、英語以外の言語を扱うべきことを認めた、そしてそこで、原則と媒介変数の理論が創り出された (Chomsky, 1981; 1986)。この理論においては、生得的な統語論モジュールは、すべての言語に対する共通の基本設計図 *bauplan* を含んでいるが、しかし、それぞれが環境の限られた範囲を持っている随意的媒介変数の小さい集合も存在し、異なった言語に対して異なったように配置されているとされる。たとえば、すべての言語は文主語を持っている、しかし、英語のようないくつかの言語は、自立している語の形で表現するのに対して、スペイン語のような他の言語は、動詞に付ける小さな語尾の形で表現するという選択の自由を持っている。異なった言語の間の変異性の出現はこうして、「生成文法 Generative Grammar」においては幻覚 illusion である。根底においては、諸言語はすべて同じであるというのである。

発達研究者が「生成文法 Generative Grammar」について知っておく

べき第三の事柄は、言語の個体発生的発達も幻覚であるとされることである。チョムスキー（1986）はそれを次のように述べている：

成熟、提示の順序、あるいは、証拠の選択的利用可能性の問題とは無関係に、言語獲得の結果は、あたかもそれが瞬間的なされたかのようである。特に、達成される中間状態は、より後の状態におけるデータの解釈のために利用できる諸原則を、達成された状態に影響するような仕方を変えることはない。(pp. 53-54)

言語構造は学習されることはなく、生得的に存在しているのであり、言語的「入力 input」によって「誘発される triggered」だけだというのである。たとえば、英語を学習している人は、文主語の観念を学習するのでも構築するのでも獲得するのでもなく、ただ、英語では文主語の生得的に知られている観念が語順で示されることを発見しなければならないだけであり、そのようにして、英語と生得的モジュールの間の結合を形成するのだという（Pinker, 1984）。この理論において発達が存在するはずがないとされる理由は、その数学的アプローチが抽象的で不変のプラトンの形式・形相として特徴付けられる初発の構造から生じるのだからである（Tomasello, 1992a）。

すると、「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説における生得的とは、正確に何であろうか。正統的なチョムスキー理論（「統率と束縛 Government and Binding」理論；Chomsky, 1981）においては、そのリストには、言語学者でない人には誰にも決してそれと分からないようなものが含まれている——たとえば、投射原理 projection principle, 空範疇原理 empty category principle, 下接制約 subadjacency constraint, そして、等位構造制約 coordinate structure constraint のような。ピンカーのリストは、少しは分かり易い。彼は、四つの基本的特徴のリストを概説しているが、それら四つは彼の信ずるところでは、特定の媒介変数環境がどうであれ、すべての言語に存在しており、そこで、おそらく生得的な言語モジュールを構成しているとされる。その四つとは：

(a)句構造規則 (X バー統語論の「樹形図 trees」の形において), これは文における要素の階層的組織と, 主語と目的語 (あるいは, その現代的相当語句) の文法的関係との双方を特定する, (b)長距離依存関係, これはどの要素が文中のどの場所へ, 文法性を保持したまま, 「移動する move」ことが出来るかを決定する (つまり, 下接制約と空範疇原理のような変形あるいは移動規則とその新しい後続概念), (c)閉じたクラスの要素 (つまり, 文法的形態素), これは文中で, 時制, 相, 法, 格, そして否定のようなものに関係して働く, そして, (d)名詞と動詞のような語彙的範疇。

構造のこれらのタイプ, しかもこれらのものだけが, 「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説における言語の生得的な計算的構造を構成する。これらすべてに共通するものが二つある。一つには, それらはすべて, 性質において本来的に「統語論的 syntactic」である: つまり, それらは, 意味にも, 特定の言語の特定の文法的慣習にも依存しない, そして, それらを取る形態は主として, 数学的エレガンス (特に, 多くの点で「生成文法 Generative Grammar」の定義的特徴である移動規則) の考慮によって操られる。ピンカーと, 「生成文法 Generative Grammar」への忠誠が幾分一般的である他の人々が数学的エレガンスそれ自体に関心を持っていないことは疑いもなく本当であるけれども, 彼らが自明のものとして取り上げる言語的現象——たとえば, X バー理論と移動規則——が数学的エレガンスに関心をはっきり持っている is 理論によって初めて生みだされ得るような現象であることも, やはり事実である。二つ目には, それらの普遍項のすべては, 他の心理的領域における認知と関係づけることが非常に難しいような言語学的に特異な用語で記述されている (これは Bates (1984a) の言う「焦土 scorched earth」政策で, この政策では他の学問にとって通じないことが徳であると考えられているという)。そんなわけで, この見地においては, 名詞と動詞は, 対象物と行動という概念と何の関係も持たずに, 統語論的分布の観点だけで定義されるし, 文の主語は, 談話の話題や注意の焦点と何の関係も持たずに, 文中のすべての他のものよりも階層的に上位にある統語論的節点として定義される, また, 語を句へと階層的に配列することは, 人間認知の多くの他の領

域に現れるような階層的組織とは何の関係も持たないというのである。

多くの言語学者は、チョムスキーとピンカーが指定している言語普遍項に同意していない(この後の議論を見よ)、そこで、彼ら多くの言語学者にとっては、それらの構造は、いかなる生得的な言語モジュールの部分でもあり得ないだろう。だからと言って、ピンカーが時々ほのめかすのだが、彼らが言語を生物学的現象とは別のものと見ていることにはならない。それはただ、彼らが言語に対する生物学的準備を「生成文法 Generative Grammar」の観点とは別のものの中に見ていることを意味するにすぎない。彼らの一人一人は言語普遍項について特定の見方を持っているかも知れないけれども、次のような仮説を立てても、それらの異を唱えている言語学者にとっては、おそらく混乱させるものではないだろう、すなわち、子供は次のようなものを備えて言語獲得にやってくる、つまり、(a)対象物、行動、そして特性を知覚し概念化する潜在能力、(b)成熟した言語使用者との相互作用を通してそれらのものと他の経験的実体を指すシンボルを獲得する潜在能力、(c)シンボルのカテゴリーを構築する潜在能力、(d)複数のシンボルとシンボルのカテゴリーを単一の発話に結合し、また、そのような結合においてそれらが果たす役割に対してシンボルの的に標識付ける潜在能力、(e)抽象的なシンボルのスキーマと鋳型 templates (構文) を構築する潜在能力、そして、(f)さまざまな言語関与的な音型を区別し産出する潜在能力。おそらく、言語は、このようなより一般的タイプの生物学的基盤に依存するのである。

そこで、問題は、人間が言語獲得に対して生物学的に準備されているかどうか、ということではない。人間は準備されているのだ。問題は、人間が、「生成文法 Generative Grammar」という種類の大人の言語的構造を初めから含んでいる生得的な言語的モジュールを備えてこの世界にやってくるのかどうか、ということである。ピンカーは、人間はそうなのだと信じており、そして、「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説を支持する多くの方面からの経験的証拠が存在すると信じている。

その証拠とはどんなものか

「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説を支持するピンカーの主要な主張は、五つの幅広いカテゴリーに入る：(a)広義の言語は人間の種に普遍的かつ種に特異な特徴であるという主張、(b)いくつかの「生成文法 Generative Grammar」構造は普遍的であるという主張、(c)特定の言語機能障害、言語的「サヴァン savants」、そして、脳の局在化のようなものにかかわるモジュール性の主張、(d)多くの言語獲得の現象は伝統的な学習メカニズムでは説明できないという主張、そして、(e)いくつかの特殊な状況における言語の獲得は「生成文法 Generative Grammar」本能の存在によって初めて説明できるという主張。明らかに、この短いフォーラムでは私は、研究のこれらの方面の一つ一つが必要としている議論の細部すべてに対して正当な扱いをしようと望むことは出来ない。私が試みるのは、生得的な「生成文法 Generative Grammar」モジュールの指定を必要としない、データの筋の通った代替の解釈が存在するというのを、一つ一つの場合に提起することに止まる。

種普遍性と種特異性

ピンカーは、あらゆる人間文化が言語を持っており、そして、人間以外の動物のいかなる集団も言語を持っていない、という非常に一般的観察から始める。この両方とも真実である。しかし、すべての文化が言語を持っているという事実が、言語の基本的構造が生得的であるということを、意味するわけではない。Bates (1984a, 1994; Bates, Thal & Marchman, 1991) が繰り返し主張してきたように、種普遍性は、種に特異な言語的遺伝子を含意するわけではない。普遍性は、世界中の人間が類似した伝達の問題に直面し、それらの問題を解決するための類似した認知的および物理的・身体的資源を持っているという見解と矛盾しないというにすぎない。Bates (1984a) のよく知られた類推によれば、すべての人間は大抵は手を使ってものを食べるが、しかし、それは手でもの食べる遺伝子 eating-with-the-hands gene が存在することを意味するわけではない。

そしてまた、人間だけが言語を話すことを学習するという事実が、生得性を支持するわけではない。種に特異であるにもかかわらず、個体によって学習される多くの行動が存在する、たとえば、人間のみが食べ物を料理するが、それはおそらく料理遺伝子 *cooking gene* の結果ではあるまい。いかなる類人猿も他の人間以外の動物も完全に人間的な言語を進化させなかったし、広範な人間による後押しによっても言語を獲得できるように見えないという事実は、ピンカーには人間と類人猿の間に根本的違いが存在することを含意する。確かに違いは存在する。しかし、類人猿が言語を持たないという単純な事実が、それだけで、その違いを特定するわけではない。言語獲得における類人猿の限られた成功を説明すると見られる類人猿と人間の間の多くの違いが存在する（たとえば、Tomasello, 1994）——類人猿の成功は、ついでながら、以前信じられていたよりも限られたものではない（Savage-Rumbaugh, Murphy, Sevcik, Brakke, Williams, & Rumbaugh, 1993）⁽¹⁾。

繰り返すと、言語は、すべての他の人間的能力と同様に人間のゲノムに基礎付けられている。しかし、種普遍性と種特異性は、この基礎付けの性質についてわれわれに語ってはくれない。たとえば、初めから大人の構造を含んでいる生得的な統語論モジュールが存在するのだろうか、あるいは、そうではなくて、人間は、個体発生の中に言語構造を創り出す一群のより一般的な認知的および文化的学習能力を持って、人生を始めるのだろうか、は語ってくれないのである。

言語普遍項

ピンカーの主張は、いくつかの言語的構造の想定された普遍性にひどく

-
- (1) ここでの文脈で次のことも指摘しておくべきである、すなわち、人間言語からの遠さを強調するために、自然状態で見られる動物のコミュニケーションのシステムを記述しようとするに当たって、ピンカーは、もっとも人間に近いと論証できる場合、すなわち、チンパンジーの身振りコミュニケーション（たとえば、Tomasello, Call, Olguin, Nagell, & Carpenter, 1994）を無視している。

依存している。問題は、言語普遍項についての主張が、典型的な形でむやみに沢山の専門的な言語学的事柄を含んでいるために、非常に難しいということである。私はそれらを避けるために最善を尽くし、その代わりに読者に充実した主張に対するいくつかの適切な源泉を指し示すつもりである。

基本的な点は、次のことである。「生成文法 Generative Grammar」は、英語を記述するために創り出された。英語に見出されるのと同じ構造の多くは、他の言語にも見出すことができる——もし眺めているのが生成文法学者であるならば、の話だが。しかし、それらの構造は、違ったやり方で定義されているために他の理論的信念の言語学者によっては見出されないかも知れないし、あるいは、他の言語学理論においてはまったく認められないかも知れない。逆に、他の理論は、「生成文法 Generative Grammar」が認めない普遍項を確認するかも知れない。重要な点は、言語学においては理論に中立な構造は存在しないということ、そして従って、普遍は全面的に理論に依存する現象だということである。にもかかわらず、ピンカーの言語普遍項についての主張と、いくつかの考えられる困難点は、次の通りである：

1. ピンカーは、句構造統語論のXバー版は人間言語に普遍的であると主張する。しかし、Xバー統語論にうまく当てはまらない一定のタイプのいくつかの言語が存在する。たとえば、ジルバル語 Dyirbal (オーストラリア原住民の言語の一つ) のような非階層型言語は規則を相当程度まで拡大する (Dixon, 1972) し、また、ラコタ語 Lakhota (アメリカ原住民の言語の一つ) は一貫した動詞句をまったく持たない (Van Valin, 1993)。
2. ピンカーは、主語と目的語の文法関係は普遍的であると主張する。しかし、それらの関係の証拠を示さないいくつかの言語が存在する、たとえば、アセーン語 Acehnese (インドネシアの言語の一つ; Durie, 1985) とタガログ語 Tagalog (フィリピンの言語の一つ; Maratsos, 1989) である。もしこの証拠を非教条主義的仕方で見

ならば、これらの言語は、「動作主 agent」「話題 topic」「行為者 actor」のような非常に具体的な言語的カテゴリーで働いているように見える。

3. ピンカーは、長距離「移動 movement」の様々な現象は普遍的であると主張する。しかし、世界の言語の大多数にとっては、移動という概念全体が決定的に不適切である、なぜなら、それらの言語の話し手が疑問文を形成するような事柄をする時に、彼らは単純に、尋ねられる要素に疑問語を入れ替えて、発話の他のすべてを本質的に変わらないままにしておく（たとえば、北方中国語とラコタ語）。英語においてさえも、「移動 movement」に対する説明は論争の余地がないわけではない。たとえば、Van Valin (1991, 1993) は、下接制約の説明を談話の実用論・語用論の観点から与えている⁽²⁾。
4. 確かに、ピンカーが主張するように、世界の言語の多くは、時制、相、法、格、そして否定のようなものを表現する文法的形態素を持っている。しかし、それらの観念のどれを特定の言語が文法化するか、そして、どのように文法化するかは、多くの通言語的変異性を示す (Talmy, 1988)、たとえば、北方中国語のような言語は極めて僅か

(2) もし実際に現実の人々が平叙文を変形して疑問文を作ることに疑いを持つならば、チョムスキー主義者のおなじみの反応は、あなたは能力モデルを運用モデルと取り違えている、というものである——移動は、心理的過程という意味ではなくて、単に一定の文法的構造の相互関係を描くために用いられているだけだ、というわけである。しかし、彼の前にチョムスキーがしているように、ピンカーは、そうするのが都合の良い時には、移動を心理的に現実的なものとして扱う。そこで、279 頁では、彼は、疑問文形成を次のように記述している：「たとえば、*He ate what* に基づいて、「単純な simple」疑問文 *What did he eat?* をとりまとめるためには、人は、「食べられるもの thing eaten」の意味的役割を示す痕跡を残して、*what* を文の始めに移動し、意味を持たない助動詞 *do* を挿入し、その *do* が動詞に対して適切な時制にあることを確かめ、この場合には *did* であるが、動詞を不定形 *eat* に転換し、そして、主語と助動詞の位置を通常の *He did* から疑問の *Did he* に転倒させなければならない。」

な文法的形態法しか持っていない。それらの文法的形態素の多くが普遍性に近いのは、まず間違いなく、人間がいくつかの観念を繰り返し表現する必要がある、また、ある観念が言語において繰り返し表現される時には、それが「文法化される grammaticalized」ようになる傾向が存在する、という事実から生ずるのである (Heine, Claudi, & Hünemeyer, 1991)。

5. 普遍性の最良の候補の中には、ピンカーが主張するように、名詞と動詞という語類がある。しかし、この場合でも、すべての言語が英語のようなカテゴリーを持っていることは、完全にははっきりしていない (Maratsos, 1988)。そればかりでなく、Braine (1987) の主張によると、名詞と動詞はまず間違いなく述語 predicate と文法項 argument の間のより基本的な認知的区別の反映である、そして、Langacker (1987b) の主張では、それらは対象物と過程の認知的カテゴリーから生ずる。

言語普遍項の以上の手短な議論は、決定的に不十分である。私には、これらの疑問に値するだけの注意を与えるスペースも専門知識もない。しかし、Van Valin (1993) と他の多くの言語学者の見解では、「生成文法 Generative Grammar」は英語のモデルの上に造られているということ——英語は、多くの点で非常に特異な言語である、というのも、基本的な統語的關係を表現するのに、ひどく語順に依存し、形態法にほとんど依存しないからである——、そして、「生成文法 Generative Grammar」は他の言語の独自の仕方で働く仕方に対する認識もなしにそれらの言語をこのプロクルステスのベッドに無理矢理押し込めている、ということである。非印欧諸言語が言語理論の出発点として取り上げられるならば、言語普遍項の非常に異なった見方が現れる (興味のある読者には、Foley & Van Valin, 1984; Van Valin, 1993 をひもとかれるようお勧めする)。多くの言語学者の見解では、言語普遍項はきっと、人間のすべての集団が世界を類似した仕方で認識し、類似した伝達的目標を持ち、そして、線状性に基づく音声=聴覚的話しことばの回路という共通の媒体を共有しているとい

う事実の結果であろう（Bates, 1994）⁽³⁾。

モジュール性

モジュール性という一般的な項目名のもとに、ピンカーの特定の主張の四つをまとめても良いだろう：その四つとは、言語は人間認知の他の領域とは違ったように構造化されているという主張、いくらかの人々は非常に特定の言語的欠陥に通じる遺伝的欠陥を持っているという主張、いくらかの人々は言語、あるいは少なくとも、統語法には相対的に関係していない認知的欠陥を持っているという主張、そして、言語の諸機能は脳の特定の部分に位置しているという主張、である。

言語構造の独自性

統語論のモジュール性を支持する一つの主張は、統語構造が他の認知領域で観察される構造に似ていない、ということである：つまり、人間認知の別の所には屈折形態法にととても似ているようなものは何もない（Chomsky, 1968）というのである。しかし、その事実は、生得的な統語論モジュール innate syntax module が存在することを含意するわけではない。チェスも多くの特異な構造を持っている：つまり、人間認知の別の所にナイト両当たり knight fork やクイーン側の攻め queen-side attack にととても似ているようなものは何もない。しかし、この特異性が生得的な

(3) 次のことも指摘しておくべきである、すなわち、ピンカーの反対の主張にもかかわらず、言語普遍項がすべての現代諸言語に対する共通の起源を反映していることもあり得る、ということである。この仮説はありそうもないと思われるかも知れないけれども、堅固な証拠の不足と、相対的に最近の進化的過去にホモ・サピエンス・サピエンスの起源をおくことに関する現在行われている論争を見ると、途方もないものではない。言語は数百万年前に生じた——これはチョムスキー主義者が描いている現代言語の複雑な点のすべてを仕上げるのに十分な時間を進化に与えるのに必要な事柄であるが——というピンカーの推測が、私の知っている非チョムスキー的理論家に共有されていないことは、確かである（Noble & Davidson, 1991 を見よ）。

チェス競技モジュールを必要とすると信ずる人は、誰もいない (Bates et al., 1991)。成熟した個体がチェスをする際に用いる認知構造は、文化的に構築されたゲームをするのを学習する流れの中で提起される問題に、一般的な認知過程を適用する過程から個体発生的に生ずるのである。

●●●●●●●● 特定の言語機能障害

いくらかの人間は、理由が分かっているものもあれば分かっていないものもあるけれども、その結果において極めて特異的なことのある言語機能障害を持っている。このことを、特定の言語構造にもっぱら当てられている特定の遺伝子が存在することを含意する、と受け取る人々がいる。最近の文献においてもっとも有名な事例は、Gopnik & Crago (1991) が有名にしたイギリスの家族である。この家族の多くの構成員は（おそらく、メンデル的型で）、文法的形態法についてある困難を示す、たとえば、複数と過去時制の語尾を上手く扱えない。科学者の中には、このことを、「生成文法 Generative Grammar」モジュールの文法的形態論の構成要素が遺伝的に決定されていることを意味するものと受け取る人もいる。問題は、その家族の障害を持つ構成員が話し言葉全般について重大な表現上の問題を持っている、ということである (Fletcher, 1990; Vargha-Khadem & Passingham, 1990)、そしてそればかりでなく、記録された欠陥のすべてが、言語的な理解ではなくて産出にある、ということである (Marchman, 1993)。それらの事実が提起するのは、この家族の言語的問題が言語的表現にかかわっており、言語的理解そのものにはかかわっていないらしいという可能性である。その点で有意義であり、彼の名誉のために指摘すべきことだが、ピンカー自身も、その証拠は、この家族の構成員が欠陥のある文法遺伝子を持っているという見方を支持するものとは信じていないのである。その代わりに、彼の仮説では、いくつかの非言語遺伝子の発現がそれらの個体においては正常な言語機能に干渉しているのだ、とされる。重要な点は、この事例も、また私の気付いているいかなる他の事例も、言語構造の特定の側面に対してコード化を行う文法遺伝子が存在するという証拠を提供してはいない、ということである。

言語的「サヴァン Savants」

統語論の自律性と生得性を支持するもっとも広く利用される証拠の一つは、低い知能指数なのだが、にもかかわらず複雑な文法的文を産出する人々、いわゆる言語的サヴァンである。そこでなされる推論は、知能指数は一般的知能の尺度であり、もし低い知能の人々がそれでも複雑な文を産出するのであれば、複雑な文を産出する能力は、一般的な認知から独立しているに違いない、というものである。知能指数テストが言語の根底に横たわる認知の諸側面を測定するものだとは、まじめな認知＝言語関係の研究者は誰も信じていないという事実は別にして、ピンカーが提供している主要な事例を眺めてみよう⁽⁴⁾。

言語的サヴァンのもっとも有名な事例は、Cromer (1991) と Yamada (1981) によって報告されている。それらの被験者は双方とも、低い知能指数だが、相対的に正常な統語的技能を示している。知能指数テストがこの文脈で有用であることを認めるとしても、思い起こさなければならないのだが、知能指数は、人の知能指数テストにおける生の得点に基づく数字（いわゆる精神年齢）をその人の暦年齢で割ることによって得られる数字である。そして、クローマーとヤマダの被験者は、低い知能指数得点にもかかわらず、4から6才の子供に等しい精神年齢のティーンエイジャーであった——4～6才の子供といえ、ピンカーが他の場所で主張しているように、実際的には大人のレベルの言語的技能を持っているのであ

(4) 関連する議論におけるピンカーの考えによると、世界の知られている言語のすべては、彼が間違って「石器時代の人々 Stone Age people」と呼んでいる (p. 25) 現代人の言語でも、等しく複雑な形態の言語的構造を持っていることは、重要であるという。この主張から、言語の複雑さは、それらの「石器時代の人々 Stone Age people」は知的に複雑ではないと想定されるのであるから、認知のおよび知的複雑さの文化的変異から独立している、ということになる。しかし、これは、虚偽の主張である、なぜなら、それらの人々が言語にとって重要な仕方でわれわれ自身よりも認知的により複雑ではないと信ずるべき理由はないからである。読み書き能力、正規の教育、そして西欧の科学は、人間言語の根底に横たわる認知の基本的過程ではないのだ。

る！⁽⁵⁾

ピンカーが引き合いに出している他の事例は、ウィリアムズ症候群の子供であるが、その子たちの言語技能は、他の認知技能よりも典型的な子供に似ているように見える。この事例においてもっとも重要な点は、それらの子供はピンカーが彼らに認めているような認知的な欠陥を全然持っていない、ということである。彼は、「彼らが they」行うことの出来ないすべての種類の単純な課題を数え上げているが、しかし、彼のリストは現実には、異なった研究者がそのような子供の大きい標本に見出している特異な欠陥のすべてを寄せ集めたものである。それらの欠陥のすべてを、あるいは大多数でも、持っている子供は一人もいない。逆に、ウィリアムズ症候群の子供の言語は、とても正常ではない。たとえば、Bellugi, Wang, & Jernigan (1994) のデータにおいては、ウィリアムズ症候群のティーンエイジャーの複雑な統語法は、典型的な発達をしている7才の子供に等しい。実際、いくつかの最近の研究の示唆するところでは、ウィリアムズ症候群の子供の言語は現実には、彼らの精神年齢から十分に予測可能である、そして従って、彼らは、発達遅滞の子供一般から区別できない言語技能を持っているのである (Gosch, Städing, & Pankau, 1994)。ウィリアムズ症候群の子供は、主として、その言語が精神年齢に基づいて予想されるよりも低い段階にある、知能指数の匹敵するダウン症候群の子供と比較されるのが典型的である (Dykens, Hodapp, & Evans, in press) ために——また、彼らの調音が非常に明瞭で、より長い型にはまった句を産出する (Gosch et al.) ために——、言語において非常に熟達していると描かれてきたのである。

しかし、現実に言語的「サヴァン savants」であることが判明したとしよう。それは何を意味するのだろうか。Haukioja (1993) は、別のタイプのサヴァン、いわゆる「データ計算者 data-calculators」を考察している。これは、低い知能指数で多くの場合に伝統的な方法で検査され表示さ

(5) この点を私に指摘してくれたことに対して、エリザベス・ベイツに感謝する。

れるもっとも基本的な算術技能を欠いている人々である、ところが、彼らは、過去でも未来でも千年間の与えられた日付の曜日を計算することが出来るのである。一体、日付の計算は認知、さらには、数学的技能から独立していると結論づけるべきなのであろうか。それらの人々は認知のおよび数学的能力をいくつかの仕方ですす能力を持っているが、他の仕方では持っていないと想定する方が、より筋が通っているのではないだろうか。

●●●●● 脳の局在化

われわれには、脳のどの部分が言語的「サヴァン savants」の言語能力や言語障害の人々の能力障害の原因となっているのかについて、多くのことが分かっているわけではない。しかし、さまざまなタイプの失語症の人々の研究と、働いている最中の脳の異なった部分の代謝活動を敏感に捉える新しい画像技術の利用のようなものを含めて、言語＝脳関係の知識の他の源泉が存在する。しかし、それらの技術を使用しても、脳のどの部分が言語理解と使用のどの側面を扱っているのかのわれわれの知識は、とても完璧ではない。実際、われわれが脳について知れば知るほどますます、言語機能の厳密な局在化は事実と異なることを見出すのである（Bates, 1994）。今では周知であり、ピンカーも記録しているように、脳における言語機能の局在化に関しては、人間集団に有意の変異が存在し、相当の割合の左利きの個体は非定型的な atypical 局在パターンを示すのであり、そして、脳に損傷を受けた子供は極めて頻繁に、脳の非定型的部分において言語機能を発達させるのである。次のことを言っておけば十分である、すなわち、脳と、さまざまな言語機能の局在化のさまざまな側面の大量の証拠を尋ねる旅の後、ピンカーは、「しかし、正直なところ、ブローカ領野やウェルニッケ領野が何をしているのかは、誰にも分からないのである」（p. 311）と認めているということである。

そのこととの関係でも指摘すべき重要なことだが、人間集団のすべての構成員にわたって特定の言語機能の厳密な局在化が存在するとしても、それは、「本能としての生成文法 Generative Grammar As Instinct」仮説についてのいかなることも含意しないだろう、ということである。多くの

仮説が、局在化を説明できるだろう。たとえば、Bever (1994) の仮説によると、言語処理の一定の諸側面は、脳機能の一定のレベルの複雑さを必要とする（たとえば、関係概念を扱うために）、そして、脳の一定の部分は、いかなるタイプのものであれ、複雑な材料を扱うのが得意である、という。そして、脳の特定の部分が言語だけを扱っているとしても、脳のその部分が言語の学習 *learning* のために利用されることは、依然として事実であろう。一般的な点を指摘すれば、脳の局在化は基本的には認知的機能の起源については何も含意しない、ということである (Bates, 1994)。

まとめ 脳に訴えることは、心理学のいくつかの集団においては、彼らが「ハードな科学 *hard science*」に訴えるので、一定の高い地位を持っている、しかし、脳における局在化、選択的欠陥、そして子供と大人における能力の島についての主張は、生得的な統語論モジュールが存在するかどうかの問題には基本的に関連を持たない。その点がもっとも明確に提出されているのは、Greenfield (1991) と Karmiloff-Smith (1992) の最近の理論的著作であるが、彼らは、それぞれ独自の仕方で、成人においては特定の認知的機能のモジュール性が存在することは十分考えられる、しかし、それは個体発生の中に特定の機能的領域へと認知的資源を流し込む結果として生ずるのだろう、と主張している。モジュール性は非常に多くの場合、発達の諸過程の結果の産物であって、その原因ではない。この見解に立てば、大人の構造にすでに含まれている生得的なカプセルに入れられたモジュールとして見るのではなくて、言語は、個体発生が進行するにつれて脳の中でモジュール化され局在化されるようになる、「古い部分から作り出される新しいマシン *a new machine made out of old parts*」(Bates, 1979) として見て良いだろう。

言語獲得

ピンカーの「本能としての生成文法 *Generative Grammar As Instinct*」仮説を支持するものとしての言語獲得の利用は、二つの相互に関係した理論的主張に訴えている：刺激の貧困と、言語に適用される時の一般的学習

手順の不充分さ、の主張である。チョムスキーは以前これらそれぞれの主張を行ったが、ピンカーは、新しいデータで論理的主張を補足する。

刺激の貧困

刺激の貧困の主張が人々の現実に学習し統御する言語の慣習に当てはまることを意味していないことを認めることは、重要である。そこで、子供が彼らの獲得しつつある言語の特定の単語や特定の統語的慣習を直接経験し学習する時には、情報の貧困は存在しない。刺激の貧困の主張の例示として用いられる例は常に、子供が「単純な帰納 simple induction」などに基づくなら「論理的には logically」犯してもおかしくないような、しかし現実には犯さない、いくつかの文法的間違いと関係している（Chomsky, 1986, pp. 7-12）。子供はそれらの間違いが実際に間違いであるという証拠を与えられていないのであるから、彼らは、言語構造の生得的知識に基づいてそれらの間違いを避けているに違いない、というわけである。

刺激の貧困の主張をするに当たって、ピンカーは、二つの経験的研究を引き合いに出している：Crain (1991) と Stromswold (1990) である。Crain (1991) の見出したところによると、子供は、もしいくつかの素朴な疑問文形成手順を使うならば、「論理的には logically」してもおかしくないような一定の種類の間違いをすることはしない（故に、彼らは生得的知識を持っている）という。そこで、子供は、「疑問文を形成するには、対応する平叙文 [つまり, "The man who is running is bald" という文] の最初の動詞を前方に移動せよ」というような単純な規則に基づいて, "Is the man who running is bald?" のようなことを言わない — この規則は "The man is bald" から "Is the man bald?" という疑問文を形成するような単純な場合に働いているものであるとされる。しかし、一体誰が、そのような規則は子供にとって単純であるとか自然であるとか、さらには、子供は平叙文から疑問文を形成するのだ、と言うのだろうか。なぜ子供が "Is the man who running is bald?" と言わないのかに対する多くの分かり易い理由がある、たとえば、彼らは以前に *who* という語の後に *-ing* 動詞形が続くのを聞いたことがないのである、というような。次のことも指

摘しておくべきだろう、すなわち、Slobin (1991) が彼の論評において指摘しているところでは、クレインの課題における子供の言語運用は、あらゆる場合に、子供による意味的および語用論的方略の利用によって（生得的な言語知識の適用によるのではなくて）妥当な形で説明できるという。

Stromswold (1990) も、子供が犯すことのない多くの間違いを報告している。ここでもまた、彼女は、いくつかの間違いは、もし子供が単純な帰納的手順で働くならば、自然であるという仮説を立てることから始めている。そこで、"I like going" と "He likes going" という対との類推に基づいて、子供は、"I am going" と "He ams going" と言うだろうと予想しても良いだろうという。しかし、ピンカーが引き合いに出している (p. 272) ほとんどすべてのそのような場合に、想定される類推は、主動詞形（たとえば、*like*）と助動詞（たとえば、*am going* における *am*）の間のものである。前者、つまり主動詞形は、その構成員の間で類推を生成することを予想しても良いような（子供が過去時制のようなものを過剰規則化する場合に見られるように）主動詞の開かれたクラスから来ているが、しかし、助動詞としての後者は、全然統一の取れた語クラスから来てはいない、したがって、他の語や語クラスへの類推は、予想すべきではないのである。全体的な要点は、言語普遍項の場合と同様に、われわれはここでもまた理論に深く埋め込まれているということである：つまり、子供がどんな仮説の下でどんな間違いをすると予想して良いかは、類推が行われる適切な言語的レベルは何であるかについて、研究者が下す理論的に動機付けられた決定に全面的に依存しているのである。もし子供が、抽象的な言語的シンボルに基づかず、むしろ、具体的な語と意味に基づいた語クラスに基づいて類推をしているとすれば、われわれは決して、「生成文法家 Generative Grammarians」が「論理的 logical」と仮定するような間違いを予想することはないだろう。

ピンカーはまた満足げに、この文脈で Gordon (1986) の研究を引き合いに出している、そしてゴードンの研究は規則的および不規則的形態論の間の生得的区別についてのピンカーの仮説 (Pinker, 1991) のいくつかと一致するという。この研究においては、子供は、複合語からある種類の複

数形を作ること求められた。もし子供が一匹のネズミを食べる動物は「マウス・イーター mouse-eater」だと教えられたとすると、彼らは、多くのネズミを食べる動物は「マイス・イーター mice-eater」だと反応した。しかし、子供は、「ラット・イーター rat-eater」について同じことをするのを嫌がった。「ラッツ・イーター rats-eater」はとても変に聞こえる、そこで、そういう間違いをしない、という。ピンカーの見解によると、この違いは、*mouse* が不規則な仕方で複数形を作る、そして、*rat* は規則的な仕方で複数形を作るということだ。子供は複合語による異なった種類の複数形形成を区別するために必要とされるような種類の言語的実例を受け取ってはいないと想定されるのであるから、この規則は、何らかの形で生得的であると想定される、つまり、この二つのタイプの複数形形成は、生得的な形態論モジュールにおける別個の過程（「生成文法 Generative Grammar」モジュールの下位モジュール）であるという。しかし、単純な代替となる説明では、子供は個体発生の中に複数の *-s* を語尾だけに付けることを学習してきた、そこで従って、複合語の場合でも、語の真ん中に複数の *-s* をおくことはしないだろう（Kemmerer, in press に引用された Van Valin）というだけのことである。

一般的に言えば、ピンカーの考えでは、子供が、彼らの産出する発話の文法性についての「否定的証拠 negative evidence」を受け取らないにもかかわらず、沢山の文法的「間違い errors」をすることがないことは、重要である。ある非常に特定の意味において、両親が日常的に子供に文法の稽古をさせることはないのは、真実である。しかし、両親が、子供の慣習的および非慣習的発話に対して異なった態度で反応するやり方、たとえば、よりしばしば文法的発話を繰り返させるが、非文法的発話を慣習的な大人の形に言い換えさせるというように、さまざまなやり方がある（Bohannon & Stanowicz, 1989; Farrar, 1992）。一般的には、子供は、彼らが話す度毎にいつも、言語的に産出したものの伝達的有效性についてあらゆる種類のフィードバックを受け取る、そしてそのことは少なくともその文法的慣習性に何らかの関係を持っている——特に、もし文法が「生成文法 Generative Grammar」におけるよりも形式主義的でない仕方

考えられるならば。

伝統的な学習過程の不充分さ

上述の例と分析のすべての根底に横たわっているのは、子供が言語獲得において携わる学習過程の問題である。すべての場合に、ピンカーは、ちょっとした変形はあるものの、Chomsky (1959) の分析を取り入れており、一般的な学習手順は言語獲得には充分ではないことを一応は明らかにしている。しかし、チョムスキーとピンカーが不充分であると示している手順は、行動主義的学習理論、単純な連合、そして盲目的帰納——1950年代から繰り越されてきた悪名高い藁人間トリオ *trio of straw men*——の活力を失った混合物であるにすぎない。より徹底的に認知的な学習理論は、カテゴリーとスキーマ形成に通じるパタン抽出の複雑な諸過程に訴え（しかし、いくつかの場合には特定の語彙項目の個別性を受け入れる余地を残して）、学習過程解明の仕事に対応するのに十分であろう（次節を見よ）。それは、ピンカーが考えていない可能性である。

まとめ 言語の個体発生における生得的統語論モジュールの必然性を支持するこれらの主張のどれ一つとして、力強いものではない。事実として、なぜ子供がいくつかの文法的「間違い errors」を犯し、他の間違いを犯さないのか (Bowerman, 1982)、また、なぜ規則的および不規則的形態法が発達において学習と使用の異なったパタンを示すのか (Chandler, 1993) の多くの理由が存在する。いくらかの理論家が「論理的 logical」と考え、そこで子供のそれらを避けることに驚嘆している間違いは、子供の観点からは全然論理的ではないと見られる——それらの論理的とされる事柄は、子供が決して行おうと思ひもしないような理論的に引き出された類推の結果にすぎないのである。連想と帰納の素朴な諸過程が言語獲得を説明できないというのが事実だからと言って、より認知的にまた機能的に洗練された認知発達理論も説明できないことになるわけではない。

特殊な環境における獲得

典型的な言語発達と結びついた刺激の貧困の主張に加えて、ピンカーは、言語学習環境がひどく貧困であるような特定の子供の言語獲得事例も論じている。

ピジンとクレオール

Bickerton (1984) に従って、ピンカーは、クレオール言語の存在と構造が言語的生得主義に対する支持を提供すると主張する。事情は次の通りである：いくつかの文化的状況においては、異なった言語を話す人々が特定の活動をするのに集まって、コミュニケーションの共通の手段を創り出さなければならない。しばしばその結果として生ずるのが、ピジン言語であり、それには自然言語の統語的特徴の多くが欠如している。いくらかの子供がほとんどもっぱらピジン言語にさらされて成長することは、おそらく事実であろうが、しかし、彼らは、最後にはクレオール言語を話すようになる。この言語はピジンに基づいているが、ピジンには失われている統語構造の多くが付け加わっている。そこで出てくる考えが、その子供は、貧困な「入力 input」を生得的な言語「バイオ・プログラ bioprogram」からの統語構造で補ったに違いない、ということになる。

しかし、Bickerton (1984) の論文に対するいくつかの論評が明らかにしているように、それらの子供の言語学習場面はよく分かっていないのである。それらの場面はすべて、相対的に遠い過去に起こったものである (ビッカートンのハワイのクレオールの場合、今から 70-100 年以前)、そこで、子供が耳にしたものが何であるのか、不確かである。大人のピジンの話し手は定義によってすべて、いくつかの文脈で (たとえば、彼らの主要な言語の他の母語話者に話しかける時) 用いる主要な言語を持っていた、そして、子供がどの程度までそれらの言語を耳にしたのかは、はっきりしていない。Maratsos (1984) の指摘によると、ビッカートンの報告しているクレ奥ールのデータにおける多くの言語的実体は、ピジンが派生してきた主要な自然言語の一つからのみ *only* 来ることが出来ただろうという、そして、Samarin (1984) と Seuren (1984) は、ピジンとクレ奥ールの

実態的人口統計について多くの事実を指摘し、問題の子供は、ビッカートンが想定したよりもはるかに多く自然言語にさらされる経験をしたことを明らかにしている。貧困な「入力 input」を補う子供の実状は、「入力 input」とはどういうものかが分かって初めて、明らかにすることが出来るものである⁽⁶⁾。

手話

刺激の貧困の主張の文脈において同様に関連しているのが、ゴルディン＝メドウの注目すべき子供（たとえば、1984）によって発案された「家庭内手話 home-sign」であるが、不可解なことにピンカーは引き合いに出していない。これは、両親が慣習的な手話を教えることを信頼せず、そこで、子供と両親が特異なサイン・手話習慣を発達させている耳の聞こえない子供である。ピジン＝クレオールの例と同様に、「家庭内手話 home-sign」を学習しているうちに、子供は、母親たちのサインには存在しないいくつかの統語的特徴を付け加える——おそらく、生得的統語論モジュールから——と想定されるという。しかし、それらの子供が行っていることは実際驚嘆すべきで、コミュニケーションの領域における人間の驚くべき創造性を実証しているという事実にもかかわらず、彼らの行っていることが生得的な統語論モジュールを含意するのかは、はっきりしない。Goldin-Meadow (1984) に対する論評において、Bates (1984b) は、形式的な統語論的記述をコミュニケーションの特異な諸形態に割り当てることに関連する、解釈の問題の多くを指摘している。たとえば、ゴルディン＝メドウは、「スーザン／波／スーザン／近い Susan / WAVE / Susan / CLOSE」のような身振り記号列 gesture string を複雑な回帰的 recursive 文の証拠として捉えているが、しかし、ベイツは、それは単に、連結された二つの

(6) おそらくこの問題点に気付いているからであろうが、ピンカーは追加して、異常な言語的環境で成長している子供の二つの事例研究を引き合いに出している。しかし、そのどちらの事例も、科学的な文献に報告されたものではなく、批判的な吟味を受けたものではない。

単純なサイン^{つい}対 sign duos であって、回帰的に関係づけられたものではないかも知れないと指摘している。

同様に重要なのが、慣習的手話を学習している、Petitto (1988) の被験者である。ペティトは、それらの個体の「自然な natural」身振りとアメリカ手話 (ASL) での真に言語的サインにおける重要な違いを記録している。たとえば、健聴児と同じように、耳の聞こえない子供は、指さしを「自然に naturally」学習する。しかし、彼らはまた、ASL でもその言語的体系におけるシンボルとして指さしを学習する (たとえば、私 *me* とあなた *you* を指す)。耳の聞こえない子供は、まさに始めからいくつかの仕方で、指さしのこれら二つのタイプを分化させる。たとえば、ASL のシンボルとしての私 *me* とあなた *you* について逆転させる間違いをする。ピンカーは、これを、ASL の根底に横たわる知識についての純粋に言語的な、おそらく生得的な、しかし「自然な natural」指さしにはない、何かがあることを意味すると捉えている。しかし、まったく同様に考えられることとして、これらの子供は、指さしの指標記号的 indexical 形態——おそらく、対象物に手を伸ばしたり、そちらへ自分自身を方向付けたりするような何らかの自然な行動から儀式化したもの——と ASL における指さしのシンボリック形態——まず間違いなく、ASL の指さしシンボルを使っている他者の観察から学習されたもの——の両方を学習するのではなからうか。学習過程とその結果として生ずる身振りタイプのこの違いは、非常に自然な形で、学習と使用のパタンにおける多くの違いに通じていくだろう (Tomasello, 1996)。身振りタイプにおけるこの違いは、人間の創造性とシンボリック技能について多くのことを語ってくれる本当に魅惑的な違いであるが、しかし、それは、生得的な言語あるいは統語論モジュールについては何も語らないのである。

まとめ 言語獲得が活発で方向のはっきりした発達の現象であることに疑問の余地はない。人間の子供は、広く多様な状況の中で言語能力の基本的諸技能を獲得する。しかし、その活発さそれ自体によって、関連している発達のメカニズムの本質をわれわれに語るわけではない。歩行は、

多分言語よりも一層強く方向付けられている発達の機能であろうが、しかし、最近の研究が明らかにしているように、それは、筋肉の動きや歩行自体の他の特定の構成要素を特定する特定の遺伝的プログラムによって統御されているのではない。そうではなくて、人間における歩行は、人間の骨格組織と筋肉組織の制約が与えられていて、行動的目標に役立つように、そのそれぞれが独自の発達の歴史を持っている多様な資源を幼児が整序するにつれて、発達するのである (Thelen, 1984, 1989)。

代替となる考えはどのようなものか

生成文法家の著作を読んでもうかがえないだろうが、言語の本質について非常に異なった一群の前提から始める代替となる言語理論がいくつか存在する。非常に重要なのが、自分たちのしていることを「認知言語学 Cognitive Linguistics」と特徴付ける言語学者である——たとえば、Langacker (1987a, 1992), Lakoff (1987, 1990), Talmy (1988), そして Croft (1991)——、そしてまた、自分たちのしていることを「機能言語学 Functional Linguistics」と特徴付ける言語学者である——たとえば、Van Valin (1993), Bates & MacWhinney (1982, 1989), そして Fillmore (1988)。これらの言語学者は、自分たちの理論を、意識的に創り出された形式言語との類推の上ではなくて、むしろ、シンボル、カテゴリー、スキーマ、フレーム、イメージ、談話視野 discourse perspectives などのような心理的に有意味な構成概念の上に打ち建てている。それらの理論は従って、数学的エレガンスの考慮によってではなく、むしろ、心理的妥当性 psychological plausibility の考慮によって推し進められる。

それらの理論を理解するためには、われわれは、言語を違った仕方で定義することから始めなければならない。特に重要なのは、統語論と意味論の間の区別である。「生成文法 Generative Grammar」は自然言語を形式言語として扱うので、統語論と意味論は根本的に対立する（上記の議論を見よ）。形式言語をモデルとして捉えない、自然言語へのアプローチは、人間のコミュニケーションと言語を非常に違ったように眺める。そこで、

「認知的 Cognitive」および「機能的 Functional」アプローチにおいては、次のように主張される、すなわち、「生成文法 Generative Grammar」によって特徴付けられているような統語論と意味論の間の全対立は、完全に方向を誤っている、と。それらのアプローチにおいては、すべての言語構造は、最小の形態素からもっとも複雑な統語的仕組みに至るまで、意味を伝える働きをするシンボルの用具である。言語における主要な対立は、統語論と意味論の間にあるのではない、そうではなくて、言語的シンボルとそれらの意味、意味するものと意味されるもの、形態と機能、シンボルと意味、の間にあるとされる。それから、意味するもの／形態／シンボルの極の内部に、われわれは、異なったタイプの言語的記号の間の区別をしても良いだろう、たとえば、語彙的、形態論的、統語的というような。意味されるもの／機能／意味の極の内部では、われわれは、意味論的および語用論的機能の間の区別をしても良いだろう。言語の理解にとって、最初に物事がどのように分割されるのかということほど根本的なことはないだろう (Langacker, 1987a) というのである*。

「認知的 Cognitive」および「機能的 Functional」言語学者にとっては、言語の創造性は、人間が認知の他の領域においてするのと同じように、彼らの言語においてカテゴリーを創り出す人間の傾向に由来するのである。それらのカテゴリーは、ある言語では一定のパターンに規則的に結合されて、一定の典型的な文や談話のスキーマ *schemas* の形成に通じることがあるだろう (たとえば、統語的「鋳型 templates」に関しては、Van Valin, 1993 を、文「スキーマ schemas」に関しては、Langacker, 1987a を、また、文法的「構文 constructions」に関しては、Fillmore, 1988 を見よ)。そこで、"Colorless green ideas sleep furiously" が英語の成熟した話し手には薄気味悪い文法的響きを持つのは、統語論が意味論とは別個だからではなくて、英語においては、動詞 *sleep* の意味論は、動詞の前のスロッ

*[訳者注] これは、言い換えれば「分節」のことである。分節については、訳者がかなり詳しく扱ったことがある：「分節についての覚え書き」(1)~(3)『中京大学教養論叢』第41巻第3,4号、第42巻第1号、2000-2001年。

トが眠るもの sleeper を含むようなスキーマ的構造を創り出し, *colorless* と *green* という語は基本的に名詞を修飾し (従って, "colorless green ideas" という句全体は眠るものと解釈され), *furiously* という語は基本的に動詞を修飾するなどなど, だからである。そこで, 発達のある時点以後には, 人々は, チョムスキーのこの有名なナンセンスな文がある意味で文法的であるのは, 名詞 (と名詞句), 形容詞, 動詞, そして副詞という文法的カテゴリーに関連する自動詞文スキーマを持っているからだ, と感じるのである。

言語の系統発生に関しては, 「認知的／機能的 Cognitive / Functional」見地では, 言語普遍項を人間の認知的および社会的普遍項から, そして, 諸言語が進化してきた仕方から, 生ずるものと見る。人間のすべての集団は, 他者に伝達したいと思う一定の経験を持ち, そうするために慣習的シンボルを使用する能力を進化させてきた。人間のすべての集団は, それらのシンボルをカテゴリー化してそれらの結合体を形成し, また, 階層的組織に関連するそれらの結合のスキーマ的パターンを抽出する能力を持っている。人間のすべての集団は, 同じ音声＝聴覚経路を持っているが, それはシンボルを線状的に, 一時に一つずつ, 表現することによって経験を伝達することを必要とさせる。それらの「制約 constraints」が存在するので, 人間のすべての集団は, 経験を伝達するための四つ, 四つだけの仕組みの結合処理が自由に出来る: すなわち, 個々のシンボル (語彙項目), シンボルに付ける標識 (文法的形態法), シンボルの順序づけのパターン (語順), そして話し言葉の韻律的変異 (たとえば, 強勢, 抑揚) である (Bates & MacWhinney, 1982)。異なった言語は, その文化に特異である特異な伝達的機能に役立つようにそれら四つの言語的仕組みを用いる異なった仕方を進化させてきた, そして, 特定の言語の進化は, そこではなされる「選択 choices」の間に非常に興味深い相互作用を示す (Slobin, 1985)。そこで, たとえば, 英語が文の基本的な「誰が何を誰にしたか who did what to whom」を標識づけるための文法的形態法の多くを失うにつれて, 語順がその機能を果たすようになり, 語順はその結果としてずっと固くなった。他のいくつかの言語では, 語順は基本的に自由であり, 「誰が何を誰にし

たか who-did-what-to-whom」は特殊な語尾によって伝えられる, あるいはさらに, いくつかの声調言語では韻律によって伝えられ, 語順はもっぱら語用論的機能に限定されている (たとえば, 強勢と話題の維持に)。主要な点は, 言語への「認知的／機能的 Cognitive/Functional」アプローチにおいては, いくつかの普遍項が予想されるのは, すべての言語が, 基本的な認知的資源, 社会的＝伝達的目標, そしてコミュニケーションの経路を共有している人間によって用いられるからである。諸言語の間の違いが予想されるのは, 変化し続ける伝達的必要性を持っている異なった人々の複雑な歴史が存在するからである。

言語の個体発生に関しては, 「認知的／機能的 Cognitive/Functional」見地は, 子供の当初の, かなり粗雑な伝達的試みの下に隠れているのが, 「生成文法 Generative Grammar」という抽象的で大人のものに似た構造であるという見方を支持する証拠は存在しないと見る。子供は, 数年の間を経る中で彼らの周囲の人々の伝達的慣習を獲得する, そして, 広い範囲の多様な発達しつつある認知的および社会的＝認知的技能を用いることによってそうするのである。最初の語を学習する際に, 子供は, 概念を形成し, 大人の注意に追従し, そして適切な伝達的文脈において新しい語を再産出する基本的諸能力を用いる (Tomasello, 1992b)。子供の最初の語結合は大体において, フレームとスロット frame-and-slot のスキーマ的形態を持っており, *kiss* や *gone* のような大人の動詞つまり「軸語 pivots」に依存している (Braine, 1976)。それらの早期の構造は, それらの出来事 (たとえば, キスすること) の子供による概念化と, それらの出来事における別個の参加者役割 (たとえば, 「キスする人 *kisser*」と「キスされるもの *kissee*」) の同定に依存する。しかし, もっとも早期の結合においては, 子供は, 異なった参加者役割をシンボリックに標識付けることは何もしない。彼らがそれらの役割を標識付け始める (たとえば, 英語においては語順の対照的使用と前置詞を使って) 時には, 出来事特異の基礎に基づいてそうするのである。一つの出来事や動詞に対して使われる文法的標識は, 他の出来事や動詞に一般化することはない (Tomasello, 1992a; Olguin & Tomasello, 1993)。もっと後になって初めて, カテゴリー化の

一般的技能に基づいて、子供は、「動作主 agent」と「道具 instrument」のような統合的 syntagmatic カテゴリーと「名詞 noun」と「動詞 verb」のような系列的 paradigmatic カテゴリーの双方を含む、より包括的な文法的カテゴリーを形成し始める (Braine, 1992; Maratsos, 1990; Olguin & Tomasello, 1993)。完全な大人のような言語への発達の移行は——複雑な文へとまとめる出来事と動詞の間のすべての種類の接合を含めて——当初は、個々の語、特に *want to*, *need to* と *know* のような鍵になる動詞についての子供の知識と、疑問文と受動文のようなものに内在する異なった談話視野をコード化する能力とに基づいている (Bloom, 1992)。

上述したことのいかなるものも、認知の多くの領域がそうであるように、言語技能が発達の間によりモジュール化されるようになるかも知れないということを否定するものではない (Karmiloff-Smith, 1992)。しかし、この発達的事実は、言語の系統発生的および個体発生的根源を、出来事構造の理解に関連し (Nelson, 1985, 1986)、また、言語的意図を含めて、大人の意図の子供による増大して行く理解に基づく (Tomasello, 1996; Tomasello, Kruger & Ratner, 1993) 基本的な認知的諸過程のようなものの中に見ることを否定するものではない。次のことも強調すべき重要なことである、すなわち、子供が言語を獲得する際に困難を経験するかも知れない多くの異なった仕方が存在することであるが、それは、相当の割合の自閉症の子供が言語を獲得することが完全に不可能であるということから、特定の言語機能障害を持っているいくらかの子供の比較的小さな問題、さらに、さまざまな種類の話しことばの障害で子供を苦しめる言語の機構 mechanics にかかわる問題に至るまで多岐にわたる。その文脈で次のように考えるのが筋が通っているように思われる、つまり、言語を異なった諸技能、その中には言語（たとえば、話しことば）に特異なものもあれば、認知的および社会認知的発達の他の領域で子供が用いるのと同じ技能もあるだろうが、それらのモザイク——Bates (1979) の言い方では、古い部分から作り出された新しい機能——として考えるということである。それらの技能は、言語的コミュニケーションの目的のために協同して繰り返し使われるにつれて、よりモジュール化された機能的領域へときっちりとも

とまっていくなのである。

まとめてみると、言語は、認知のいくつかの他の領域と比べると、生得的モジュール（つまり、本能）の地位に対してはとても貧弱な候補であるように思われるだろう。言語は、異なった文化の間で根本的に異なっている文化的人工物 artifacts である、そして、言語は、その話し手の伝達の必要が時の経過の中で進化するにつれて、重要な仕方に変化する。そればかりでなく、言語獲得の下位能力 subcompetencies の多くは、認知の他の領域と共有されているように思われる：すなわち、語にかかわる能力はシンボル形成とカテゴリー化の一般的諸過程に依存しているし、統語法にかかわる能力はシンボル形成、カテゴリー化、そして階層的組織化の一般的諸過程に依存しているし、また、語用論にかかわる能力は社会的相互作用とコミュニケーションの一般的諸技能に依存している。そして、もちろん、言語の全重要点——意味的次元——は、個体が非言語的に持っている経験の幾分かを互いに伝え合うことである。私の見解では、相当数の他の提案されている認知的モジュールが存在する、たとえば、素朴 naive 物理学と素朴心理学（たとえば、Karmiloff-Smith, 1992）、それらはモジュールつまり本能に対するはるかに適当な候補である、なぜなら、それらは、異文化間でその表現においてはるかに一様である能力を扱っていて、相互作用的经验の特定のタイプに依存することがはるかに少なく、また、はるかに内的に一貫し、認知の他の領域からはっきり区別されているからである。

言語と、言語の系統発生と個体発生への「認知的／機能的 Cognitive / Functional」アプローチの以上の手短な説明の要点は、ただ代替となる考えが存在することを示すことに過ぎない。その代替案の細部は、まだ多くの人々によって論じられつつあり、人によっては本稿での私の簡単な特徴付けのいくつかに同意しないこともあるだろう。しかし、確実なことは、言語の「生成文法 Generative Grammar」の特徴付けや、その数学的エレガンスの目標や、言語的生得主義についての形式的に引き出された理論内的観念を確認するための証拠の選択的使用に賛成しない多くの思慮ある研究者が存在するということである。全体的には、私は自分自身が、生成

文法のパラダイムと「認知的／機能的 Cognitive/Functional」なパラダイムは根本的に異なった目標を持っているという趣旨の、Braine (1994) の鋭い分析に完全に同意していることを見出している。実際には、チョムスキー的生得主義は、論理によって、独自にかつ生得的に人間的なものを識別しようとする哲学的努力である。それに対して、「認知的／機能的 Cognitive/Functional」アプローチは、人々がどのように自然言語を学習し使用するかを理解することを目指す科学的努力なのである。

結 論

彼の本の序文で、ピンカーは、「私の本拠である組織、マサチューセッツ工科大学は、言語の研究にとって特別な環境である」と述べている。私が本稿でしようとしてきたことは結局のところ、その陳述を強調することになっている、それは、生活のために言語を研究しているのではない発達研究者たちがこの一般人向けの本の主張を現実にある姿、つまり、論争の一方の側の理論的立場があたかも唯一の立場であるかのように提出されているもの、として見る事が出来るようにするためである。

論争の他方の側は、言語学と心理学の間の相互交通は双方向的であると信じている認知的および機能的言語学者 (Lakoff, 1987, 1990; Langacker, 1987a, 1992) によって創り出された、言語への新しいアプローチによって代表される。この見解では、言語学者は、自らの理論を形式的考慮より以上のものに基礎付けなければならない。彼らは、他の行動的および認知的諸科学における研究に支持されている構成概念に基礎付けなければならないのである。その結果、心理学者と他の認知科学者は、言語理論の構築から恩恵を受けるばかりでなく、それに寄与するかも知れない。ということは、発達研究者にしてみると、われわれは、子供が個体発生の異なった段階において経験するような、言語の構造を経験的に探究するばかりでなく、理論的に特徴付けるのを助けるのに、積極的な役割を果たさなければならない、ということを意味する。そのようにして、言語へのこれらの新しいアプローチは、われわれに対して、最近の歴史において初め

て、有意味な仕方と言語の心理学 *psychology* とその発展を探究する可能性を開いてくれるのである。

参考文献

- Bates, E. (1979). *The emergence of symbols: Cognition and communication in infancy*. New York: Academic.
- Bates, E. (1984a). Bioprograms and the innateness hypothesis. *Behavioral and Brain Sciences*, 7, 188-190.
- Bates, E. (1984b). On the invention of language: An alternative view. *Mono-graphs of the Society for Research in Child Development*, 40, 130-142.
- Bates, E. (1994). Modularity, domain specificity, and the development of language. In D. C. Gajdusek, G. M. KeKhann, & C. L. Bolis (Eds.), *Evolution and neurology of language. Discussions in Neuroscience*, 10 (1-2), 136-149. [Reprinted in W. Bechtel, P. Mandik, J. Mundale, & R. Stufflebeam (Eds.), *Philosophy and the neuroscience: A reader*. Oxford: Blackwell, 134-151].
- Bates, E., & MacWhinney, B. (1982). Functionalist approaches to grammar. In L. Gleitman & E. Wanner (Eds.), *Language acquisition: The state of the art*. Cambridge: Cambridge UP.
- Bates, E., & MacWhinney, B. (1989). Functionalism and the competition model. In B. MacWhinney & E. Bates (Eds.), *The cross-linguistic study of sentence processing*. Cambridge: Cambridge UP.
- Bates, E., Thal, D., & Marchman, V. (1991). Symbols and syntax: A Darwinian approach to language development. In N. Krasnegor, D. Rumbaugh, R. Schiefelbusch, & M. Studdart-Kennedy (Eds.), *Biological and behavioral determinants of language development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bellugi, U., Wang, P., & Jernigan, T. (1994). Williams Syndrome: An unusual neuropsychological profile. In S. Broman & J. Grafman (Eds.), *Atypical cognitive deficits in developmental disorders*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Bever, T. (1994, July). Is the hippocampus the Chinese smithy? Lecture given at the International Institute on Cognitive Science, Buffalo, New York.
- Bickerton, D. (1984). The language bioprogram hypothesis. *Behavioral and Brain Sciences*, 7, 173-221.
- Birney, R., & Teevan, R. (Eds.). (1961). *Instinct*. New York: Van Nostrand.
- Bloom, L. (1992). *Language development from two to three*. Cambridge: Cambridge UP.

- Bohannon, N., & Stanowicz, L. (1989). Bidirectional effects of imitation and repetition in conversation: Adult responses to children's language errors. *Developmental Psychology*, 24, 684-689.
- Bowerman, M. (1982). Reorganizational processes in lexical and syntactic development. In L. Gleitman & E. Wanner (Eds.), *Language acquisition: The state of art*. Cambridge: Cambridge UP.
- Braine, M. (1976). Children's first word combinations. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 41.
- Braine, M. (1987). What is learned in acquiring word classes — A step toward an acquisition theory. In B. MacWhinney (Ed.), *Mechanisms of language acquisition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Braine, M. (1992). What sort of innate structure is needed to bootstrap into syntax? *Cognition*, 45, 77-100.
- Braine, M. (1994). Is nativism sufficient? *Journal of Child Language*, 21, 9-31.
- Chandler, S. (1993). Are rules and modules really necessary for explaining language? *Journal of Psycholinguistic Research*, 22, 593-606.
- Chomsky, N. (1959). A review of B.F. Skinner's "Verbal Behavior." *Language*, 35, 26-58.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (1968). *Language and mind*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Chomsky, N. (1980). Rules and representations. *Behavioral and Brain Sciences*, 3, 1-61.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on government and binding*. Dordrecht, The Netherlands: Foris.
- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of language*. Berlin, Germany: Praeger.
- Collado-Vides, J. (1991). A syntactic representation of the units of genetic information. *Journal of Theoretical Biology*, 148, 401-429.
- Crain, S. (1991). Language acquisition in the absence of experience. *Behavioral and Brain Sciences*, 14, 697-650.
- Croft, W. (1991). *Syntactic categories and grammatical relations: The cognitive organization of information*. Chicago: U. of Chicago Pr.
- Cromer, R. (1991). *Language and thought in normal and handicapped children*. London: Blackwell.
- Dixon, R. (1972). *The Dyirbal language of North Queensland*. Cambridge:

- Cambridge UP.
- Durie, M. (1985). *A grammar of Acehnese*. Dordrecht, The Netherlands: Foris.
- Dykens, E., Hodapp, R., & Evans, D. (in press). Profiles and development of adaptive behavior in children with Down Syndrome. *American Journal on Mental Retardation*.
- Farrar, J. (1992). Negative evidence and grammatical morpheme acquisition. *Developmental Psychology*, 28, 90-98.
- Fillmore, C. (1988). The mechanisms of construction grammar. *Berkeley Linguistic Society*, 14, 35-55.
- Fletcher, P. (1990). Speech and language defects. *Nature*, 346, 226.
- Foley, W., & Van Valin, R. (1984). *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge UP.
- Foulkes, D. (1978). *A grammar of dreams*. New York: Basic Books.
- Goldin-Meadow, S. (1984). Gestural communication in deaf children. *Mono-graphs of the Society for Research in Child Development*, 49 (Serial No. 207).
- Gopnik, M., & Crago, M. (1991). Familial aggression of a developmental language disorder. *Cognition*, 39, 1-50.
- Gordon, P. (1986). Level-ordering in lexical development. *Cognition*, 21, 73-93.
- Gosch, A., Städing, G., & Pankau, R. (1994). Linguistic abilities in children with Williams-Beuren Syndrome. *American Journal of Medical Genetics*, 52, 291-296.
- Greenfield, P. (1991). Language, tools, and brain. *Behavioral and Brain Sciences*, 14, 531-595.
- Haukioja, T. (1993). Hyperlinguistic individuals and the relation between language and cognition. *Cognitive Linguistics*, 4, 403-406.
- Heine, B., Claudi, U., & Hünnemeyer, F. (1991). *Grammaticalization*. Chicago: U. of Chicago Pr.
- Jackendoff, R. (1983). *A generative theory of tonal music*. Cambridge, MA: MIT Pr.
- Karmiloff-Smith, A. (1992). *Beyond modularity*. Cambridge: MIT Pr.
- Kemmerer, D. (in press). A review of S. Pinker's *The language instinct*. *Minds and Machines*.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: U. of Chicago Pr.
- Lakoff, G. (1990). The Invariance Hypothesis: Is abstract reason based on

- image schemas? *Cognitive Linguistics*, 1, 39-74.
- Langacker, R. (1987a). *Foundations of cognitive grammar, Volume 1*. Stanford: Stanford UP.
- Langacker, R. (1987b). Nouns and verbs. *Language*, 63, 53-94.
- Langacker, R. (1992). *Foundations of cognitive grammar, Volume 2*. Stanford: Stanford UP.
- Marchman, V. (1993). Constraints on plasticity in a connectionist model of the English past tense. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 5, 215-234.
- Maratsos, M. (1984). How degenerate is the input to creoles and where do its biases come from? *Behavioral and Brain Sciences*, 7, 200-201.
- Maratsos, M. (1988). The acquisition of formal word classes. In Y. Levy, I. Schlesinger, & M. Braine (Eds.), *Categories and processes in language acquisition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Maratsos, M. (1989). Innateness and plasticity in language acquisition. In M. Rice & R. Schiefelbusch (Eds.), *The teachability of language*. Baltimore: Paul Brooks.
- Maratsos, M. (1990). Are actions to verbs as objects are to nouns? On the differential semantic bases of form class category. *Linguistics*, 28, 1351-1379.
- Nelson, K. (1985). *Making sense: The acquisition of shared meaning*. New York: Academic.
- Nelson, K. (1986). *Event knowledge: Structure and function in development*. Hillsdale: Erlbaum.
- Noble, W., & Davidson, I. (1991). The evolutionary emergence of modern human behavior: Language and its archeology. *Man*, 26, 223-253.
- Olguin, R., & Tomasello, M. (1993). Twenty-five-month-old children do not have a grammatical category of verb. *Cognitive Development*, 8, 245-272.
- Pettito, L. (1988). "Language" in the prelinguistic child. In F. Kessel (Ed.), *The development of language and language researchers*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Pinker, S. (1984). *Language learnability and language development*. Cambridge: Harvard UP.
- Pinker, S. (1991). Rules of language. *Science*, 253, 53-535.
- Pinker, S. (1994). *The language instinct: How the mind creates language*. New York: Morrow.
- Samarin, W. (1984). Socioprogrammed linguistics. *Behavioral and Brain Sciences*, 7, 206-207.

- Savage-Rumbaugh, S., Murphy, J., Sevcik, R., Brakke, K., Williams, D., & Rumbaugh, D. (1993). *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 58 (Serial No. 233).
- Seuren, P. (1984). The bioprogram hypothesis: Fact and fancy. *Behavioral and Brain Sciences*, 7, 208-209.
- Slobin, D. (1985). *The crosslinguistic study of language acquisition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Slobin, D. (1991). Can Crain constrain the constraints? *Behavioral and Brain Sciences*, 14, 633-634.
- Stromswold, K. (1990). *Learnability and the acquisition of auxiliaries*. Unpublished doctoral dissertation. MIT Cambridge, MA.
- Talmy, L. (1988). The relation of grammar to cognition. In B. Rudzka-Ostyn (Ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Thelen, E. (1984). Learning to walk: Ecological determinants and psychological constraints. In L. Lipsitt & C. Rovee-Collier (Eds.), *Advances in infancy research, Volume 3*. Norwood, NJ: Ablex.
- Thelen, E. (1989). Self-organization in developmental processes. In M. Gunnar & E. Thelen (Eds.), *Systems and development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Tomasello, M. (1992a). *First Verbs: A Case Study of Early Grammatical Development*. New York: Cambridge UP.
- Tomasello, M. (1992b). The social bases of language acquisition. *Social Development*, 1, 67-87.
- Tomasello, M. (1994). Can an ape understand a sentence? *Language and Communication*, 14, 377-390.
- Tomasello, M. (1996). The cultural roots of language. In B. Velikovsky (Ed.), *The origins and destiny of language*. Princeton: Princeton UP. [変更部分あり。「解説」における番号16を見よ]
- Tomasello, M., Call, J., Nagell, K., Olguin, K., & Carpenter, M. (1994). The learning and use of gestural signals by young chimpanzees: A trans-generational study. *Primates*, 35, 137-154.
- Tomasello, M., Kruger, A., & Ratner, H. (1993). Cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences*, 16, 495-552.
- Tomasello, M., & Olguin, R. (1993). Twenty-three-month-old children have a grammatical category of noun. *Cognitive Development*, 8, 451-464.
- Van Valin, R. (1991). Functional theory and language acquisition. *First Language*, 11, 7-40.

Van Valin, R. (1993). A synopsis of role and reference grammar. In R. Van Valin (Ed.), *Advances in Role and Reference Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

Vargha-Khadem, F., & Passingham, R. (1990). Speech and language defects. *Nature*, 346, 226.

Yamada, J. (1981). Evidence for the independence of language and cognition: Case study of a "hyperlinguistic" adolescent. *UCLA Working Papers in Cognitive Linguistics*, 3, 93-115.

〈訳者解説〉

上に訳出したマイケル・トマセロの論文は、タイトルからして明確・明快な内容であることを示唆しているが、事実、内容は明確かつ明快である。したがって、屋上屋を架するような内容の要約的解説は不必要であろう。

この解説では、日本では専門家集団のなか以外にはまだそれほど知られていないと思われるマイケル・トマセロについて、周辺的な事柄をいくつか取り上げて、本訳のみならず、今後出版されるであろう彼の著作の翻訳を読むさいに役立つ知識を提供することで、解説に代える。

1. 原論文について

原論文は、学術誌 *Cognitive Development*, 10, 131-156 (1995) に掲載されたものである。Book Review としての扱いである。この書評の対象となっているのは、

Pinker, S. (1994). *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: William Morrow.

であって、これは、日本でも『言語を生み出す本能』上・下 (NHK 出版) という題で翻訳出版されており、かなり多数の読者を獲得したようである。この本のタイトル *The Language Instinct* と原論文のタイトル *Language is Not an Instinct* とを並べれば明白のように、トマセロは、真正面からピンカーの考えを批判するのである。その詳細な内容については、本訳を読んでいただきたいとお願いする以外にない。

ここで両者に共通に使われている instinct という語について触れておきたい。トマセロもこの論文で、「本能」という専門用語の内容について解説している（本訳 81 頁）が、別の面から二つの点を指摘しておこうと思う。

中京大学教授・桑村哲生博士は、昨年秋、一般人向けの『性転換する魚たち——サンゴ礁の海から——』（岩波新書）という興味深い本を出された。その内容を乱暴に要約すれば、オス→メスに性転換し、状況によっては、再びメス→オスに転換するという生態を持つ魚の話である。この不思議な現象の説明において氏は、「本能」という専門用語を使っているだろうか。少なくとも私が確認した限りでは、否である。

性転換は、彼らの「社会的」行動の中で出現するのである。私としては、氏が「社会的」ということの概念の内容にもう少し丁寧に触れて欲しかったという希望はあるが、その具体的内容はこの上なく明確である。この本のことを持ち出して、なにを言いたいのかと言えば、性転換する魚においてさえ、「本能」ではなくて「社会的」行動が説明の基本に置かれるのに、人間の言語（活動）に「本能」を持ち出すことに違和感を抱く人が少なくないだろう、ということである。

また、人によっては、20 世紀末に言語「本能」を持ち出すことは時代錯誤ではないかと思うだろう。事実そうであろう、と私は思う。

James Burnett, Lord Monboddo (1714-1799) という 18 世紀スコットランドの文人は、全 6 巻の *Of the Origin and Progress of Language* という著作を出しているが、その第 1 巻（1773 年出版）において、言語をどのように捉えるべきかについて詳細な議論を展開している。とくに、言語を「本能 instinct」によるものとするのか、あるいは「技能 art」によるものとするのかを検討している。

彼の本能と技能の根本的な違いについての考えは、次の通りである。

というのは、私がすでに観察したように、本能と技能の間の大きな違いの一つは、次のことにある、すなわち、本能によってなされることは最初にも最後におけると同じように立派に遂行される、それに対して、技能は必然的に漸進的改善によって形成されるのだ、ということである。(p. 301)

彼の「本能によってなされることは最初にも最後におけると同じように立派に遂行される」という指摘は重要である。少なくとも私にとっては、言語が本能によるのかそうではないのかという問題は、すでに200年以上前に決着の付いている事柄である。モンボドについては、ここでこれ以上触れるわけに行かない。関心のある人は、彼のこの著作を扱ったI. M. ハメット氏の博士論文の拙訳を参照されたい（「モンボド卿の『言語の起源と進歩について』その源泉，創まり，背景，特に弁護士図書館に注目して」『中京大学教養論叢』第30巻第3号～第32巻第1号，1990-1991）。また、私は、彼のartの概念についてかなり詳細に分析したことがある（「ARTからCULTUREへ——学としてのFolklore成立の背景を探る——」筑波大学比較民俗研究会編集『比較民俗研究』第7, 8号，1993）。

「本能」という語を学問的内容が記述される著作の核心的用語として用いようとする時、その人の前には、二つの道がある。生物学的あるいは心理学的に、要するに科学的に、厳密な概念として用いることを目指すのが一つ。日常用語における使用に乗って、比喩的な使用から出発し、比喩的転用を重ねて、日常語としての意味的豊かさと曖昧さの拡大に寄与する方向がもう一つである（これはこれで、決して意味のないことではない）。比喩から出発するならば、それ以後の論理の運びがいかに厳密であったとしても、全体は砂上の楼閣に終わる危険性があるのではないだろうか。「遺伝子」についても、トマセロも指摘している（本訳88-89頁）ように、同じ問題が含まれているであろう。

このような「本能 instinct」という語の用い方は、本解説3. で簡単に触れている、言語理論と学問の他の分野との間の関係についての「一方向」論と結びついている可能性が高いように思われる。しかし、その点についてはこれ以上踏み込まないことにする。

原論文は、専門学術誌に掲載され、書く際にトマセロの念頭にあった読者は主として発達心理学者であったと思われるが、もっと広く読まれても良い文章ではないかと思い、自分の勉強のためにすでに翻訳してあった訳文を推敲して紀要に発表することにした。生成文法理論に関心を持ちなが

ら、その難解な術語の続出に閉口し、評価することを諦めてしまっている人には、本論文は格好の手がかりを提供するであろう。

翻訳に当たっては次のように処理した。

- ① 引用符で囲まれた語句は、「 」でくくり、煩をいとわずに原語を添えた。
- ② イタリックの語句は、傍点を付し、原語を添えた。
- ③ 他に原語を添えたものがあるが、とくに明確な基準をもうけたものではない。
- ④ 「参考文献」において、Bates (1994) と Tomasello (1996) は、原文では in press となっているが、確認できたので年を入れた。とくに後者については、ミスプリントではないので、ご注意いただきたい。

2. マイケル・トマセロについて

略歴は以下の通りである。

1972 年：アメリカ・デューク大学心理学部卒業

1980 年：アメリカ・ジョージア大学心理学部の Ernest von Glasersfeld のもとで博士学位取得

同 年：アメリカ・エモリー大学心理学部の助手。その後、助教授・教授となる。本訳の原論文を書いた当時は、この大学に在職中だった。

1998 年：ドイツ・ライプチヒに新設されたマックス・プランク進化人類学研究所の co-director（共同所長）となる。

2001 年：新設のウォルフガング・ケーラー記念霊長類研究センター所長を兼務

なお、マックス・プランク研究所は、近年とみに名声を高めつつある。本年 4 月 13 日の新聞では、「論文引用ランキング」で、最近の 11 年間でトップを占めたと報道されているし、この 2 月に出た『ネアンデルタール人の正体』（朝日新聞社）でも各所でこの進化人類学研究所の学者の研究

が引用されている。また、昨年2月には、日本学術振興会とマックス・プランク協会が「先端研究拠点事業に関する覚書」を交換しており、京都大学霊長類研究所とマックス・プランク進化人類学研究所が共同で「先端研究事業」を推進しつつある。トマセロは、日本の霊長類学界において早くから注目されている学者である。進化人類学研究所には、近年、有能な言語学者も相次いで着任しているようである。また、昨年 *Language, Mind and Brain: Some Psychological and Neurological Constraints on Theories of Grammar* (Edinburgh UP) という興味深い本を出した Ewa Dabrowska は、進化人類学研究所で過ごした際に交流したトマセロをはじめとする研究者たちに謝意を述べている。

3. 単行本の編著書について

マイケル・トマセロは、広い視野を持って用意周到に、かつまた、極めて精力的に研究を積み重ねている学者である。まず単行本の編著書を年代順に挙げておこう。(参照の便宜のため、以下に挙げる彼の著作には通しの著作番号を付ける。)

1. Tomasello, M. 1992. *First Verbs: A Case Study in Early Grammatical Development*. Cambridge UP.
2. Tomasello, M., & Merriman, W. eds., 1995. *Beyond Names for Things: Young Children's Acquisition of Verbs*. Erlbaum.
3. Tomasello, M., & Call, J. 1997. *Primate Cognition*. Oxford UP.
4. Tomasello, M. ed. 1998. *The New Psychology of Language*, vol. 1: *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*. Erlbaum.
5. Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard UP.
6. Tomasello, M., & Bates, E., eds. 2001. *Language Development: Essential Readings*. Blackwell.
7. Tomasello, M., ed. 2002. *The New Psychology of Language*, vol. 2: *Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*. Erlbaum.
8. Tomasello, M. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard UP.
9. Tomasello, M., & Slobin, D. I., eds. 2005. *Beyond Nature-Nurture: Essays*

in Honor of Elizabeth Bates. Erlbaum.

これらの編著書の持っている意味についてごく簡単に触れたい。そのためにもまず著作番号5から一つのことだけ取り上げる。（なお、この著書については、そこで展開されている「言語的シンボル」の概念を中心に、かなり詳しい紹介をしている次の拙論を参照されたい：「言語的シンボルについて——その概念と成立のメカニズムを考える——」『中京大学教養論叢』第45巻第3号，2004.）

この著書は、私の見るところでは、トマセロのそれまでのすべての研究が流れ込み、その後のすべての研究が流れ出して行く結節点のような位置を占めている。その最初の部分で、彼は人間の進化における「謎」を究明するためには、次の三つの時間枠を設定して、それぞれの枠内での進化・発達の内実を追究する必要があるとしている。（そして、その際彼が取り上げる問題は具体的には、社会的認知，社会的学習，コミュニケーションに関わる事柄である。これは三つの焦点と言える。）

(1) 系統発生的時間・枠組

(2) 歴史的時間・枠組

(3) 個体発生的時間・枠組

彼の幅広く、圧倒されるほど多量の研究を見通す観点をこの三つは与えてくれる。彼自身、三つの焦点に関する自分の研究を計画し、見通しを立て、位置付ける際に、この三つの枠組を意識的に適用しているのは当然であろう。

この三つの枠組を前提とすることによって、彼がなぜ一冊の研究書になる（著作番号3）ほどまでに霊長類の認知についての研究をしているのか、幼い子供の「最初の動詞」をはじめとする動詞の獲得についての研究書（著作番号1, 2）を出しているのか、子供の言語獲得の現時点で最高の研究書（著作番号8）を出しているのかが十分に納得できるのではなかろうか。

トマセロの構想する三つの枠組・焦点を意識した研究、より狭く特定し

て言えば、個体発生的枠組における三焦点の研究、言い換えれば、言語獲得の心理学の進展は、「言語理論」をめぐる現状によって停滞し混乱に陥っている側面がある、というのが彼の見解であろうと思われる。

言語理論家の中には、たとえば言語起源の問題についても、「われわれはすでにその問題に正しい答えを出している。だから、他の分野の研究者たちはすべからくわれわれの言語理論をもっと勉強すべきだ」と主張する向きもある（その一例、雑誌『科学』（岩波書店）2004年7月号の「特集・言語の起源」に登場している「言語理論家」）。そのような「言語理論家」の考えでは、言語理論と他の分野の学問との関係は、言語理論→（たとえば）心理学のような「一方向」論で片づけられてしまう。「われわれの言語理論をもっと勉強せよ！」でおしまいだからである。

トマセロの姿勢は、「双方向」論である。つまり、言語学と心理学の間関係は、どちらか一方が権威をもって他方に対するのではなくて、相互に学び合い考え合う関係であるべきだという立場である。双方向論こそが科学的態度であることは改めて指摘するまでもないだろう。

科学的に正しい態度であるとはいえ、双方向論を実践することは容易ではない。ごく図式的に言えば、自分のよって立つ言語理論・言語観に対して常に反省を加えながら（なぜなら、その反省がないとその時その時に支配的なものに流されるだけだからである）専門的な研究を進める一方で、他方では、現在の言語「諸」理論についての幅広く柔軟な検討と理解が要求されるからである。その努力をトマセロは、おそらく1970年代から実にねばり強く続行している、というのが私の見方である。

彼が双方向論のスタンスをを明確に出したのが、著作番号1である。

この著作は、彼のお嬢さん（Travis）の言語行動を毎日観察し、「日誌diary」にしたものが基礎資料となっている。その少なくとも半分は、奥さんによるもので、彼は "my late wife Susannah Ashley" に感謝のことばを述べている。この観察は、1974年になされた。その資料の精選部分を利用して、修士論文（1977）、博士論文（1980）が出来上がった。その後、資料をコンピュータ化して全面的に活用することによって完成したのが著作番号1である。

日誌が出来上がってから著作番号1が出るまで、18年の月日が流れている。この間に彼の双方向論は誕生し成長したに違いない。とくに博士論文完成以後の10年余り、彼は、日誌のコンピュータ化の仕事に取り組みながら、早期の子供の言語獲得を納得の行く形で扱える言語理論の探究を進めたことだろう。これらの仕事は別々に独立して進めることは不可能である。内容的に相互に作用し影響し合うからである。

この時期に彼が出会った言語理論関連の著作の主要なものは、次の通りである。年代順に挙げておく。

- Bates, E., & MacWhinney, B. 1979. A functionalist approach to the acquisition of grammar. In E. Ochs & B. Schieffelin, eds., *Developmental pragmatics*. Academic Press.
- Givón, T. 1979. *On Understanding Grammar*. Academic Press.
- Lakoff, G. 1980. What ever happened to deep structure? *Behavioral and Brain Sciences* 3: 22- 23.
- Bates, E., & MacWhinney, B. 1982. Functionalist approach to grammar. In L. Gleitmen & E. Wanner, eds., *Language Acquisition: The State of the Art*. Cambridge UP.
- Bates, E., & MacWhinney, B. 1987. Competition, variation, and language learning. In B. MacWhinney, ed., *Mechanisms of Language Acquisition*. Erlbaum.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. of Chicago Press.
- Langacker, R. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1. Stanford UP.
- Rudzka-Ostyn, B. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. Benjamins.
- Bates, E., & MacWhinney, B. 1989. Functionalism and the competition model. In B. MacWhinney & E. Bates, eds., *The Cross-Linguistic Study of Sentence Processing*. Cambridge UP.
- Givón, T. 1989. *Mind, Code, and Context*. Erlbaum.
- Lakoff, G. 1990. The Invariance Hypothesis: Is abstract reason based on image schemas? *Cognitive Linguistics* 1: 39-74.
- Langacker, R. 1990. Subjectivication. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Van Valin, R. in press/1993. A synopsis of role and reference grammar. In R. van Valin, ed., *Advances in Role and Reference Grammar*. Benjamins.

トマセロは、ある意味で強運の人である。というのは、修士論文、博士論文を書きながら、また、博士学位取得後に「日誌」のコンピュータ化を進めながら、自分にぴったり来る言語理論を模索している間の1987年に、上掲のLakoff, Langackerの著作が刊行され、その直後に国際認知言語学協会 International Cognitive Linguistics Association の創設とその正式な機関誌『認知言語学』 *Cognitive Linguistics* の創刊に遭遇したのだからである。この時までには彼の言語理論に関するスタンスは完全に明確になっていたに違いない。

その宣言が、S. Pinker & P. Bloom. 1990. Natural language and natural selection (*Behavioral and Brain Sciences* 13) という論文に対するごく短い論評文であるが、下記の著作番号10であった。

そして、彼はその後も、双方向論実践の一端として著作番号14, 18, 19, 22, 24などの論文を産出し続けるのである。

こうした努力の産物が、編著書においては、彼の見るところ双方向論に立っている言語学者たちによる（発達研究者には）入手しにくい論考を集めた上掲の著作番号4, 7であり、また、双方向論に立っている心理学者の研究成果を集めているのが著作番号6である。そして、6を共同で編集したエリザベス・ベイツの早すぎる死を悼んで編集したのが著作番号9である。（私は、上記の拙論「言語的シンボルについて」を書いた時には、無知から、ベイツを相当年配の学者だろうと予想した。ところが、*Language and Context: The Acquisition of Pragmatics* を書いたのが、30才前、*The Emergence of Symbols: Cognition and Communication in Infancy* を書いた時にも、30才になったばかりだったのである。これは、喜ばしくかつ悲しい間違いであった。）

4. 単著・共著論文について

トマセロの単著論文は、2005年4月現在で私が把握しているものは、55編以上ある。本年中に60編を超えられると思われる。

共著論文は、同様に現時点での把握では110編以上ある。本年中に120

編を超えるに違いない。

これら 170 編に近い論文を見通すのに、上で指摘した三つの「時間・枠組」と「焦点」が役立つことは言うまでもない。

彼の論文から、双方向論実践の前提となっている言語理論に関連する論考などのタイトルだけ挙げておくことにする。(三つの枠組、三つの焦点に関するものというように一般的に捉えれば、私の把握している論文すべてを挙げなければならない。すべてを挙げる用意はあるけれども、私の独断で、少数を選択する。)

10. Tomasello, M. 1990. Grammar yes, generative grammar no. Commentary on Pinker and Bloom. *Behavioral and Brain Sciences* 13: 759-760.
11. Tomasello, M., Kruger, A. C., & Ratner, H. H. 1993. Cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences* 16: 495-552.
12. Nagell, K., Olguin, K., & Tomasello, M. 1993. Processes of social learning in the tool use of chimpanzees (*Pan troglodytes*) and human children (*Homo sapiens*). *Journal of Comparative Psychology* 107: 174-186.
13. Call, J., & Tomasello, M. 1994. Social learning of tool use by orangutans. *Human Evolution* 4: 297-313.
14. Tomasello, M. 1995. Language is not an instinct. [本訳の原論文]
15. Tomasello, M. 1996. Do apes ape? In B. G. Galef Jr. & C. M. Heyes, eds., *Social Learning in Animals: The Roots of Culture*. NY: Academic Press.
16. Tomasello, M. 1996. The cultural roots of language. In B. M. Velichkovsky & D. M. Rumbaugh, eds., *Communicating Meaning: The Evolution and Development of Language*. Erlbaum.
17. Kruger, A., & Tomasello, M. 1996. Cultural learning and learning culture. In D. Olson, ed., *Handbook of Education and Human Development: New Methods of Teaching, Learning, and Schooling*. Blackwell.
18. Tomasello, M. 1998. The return of constructions: review article of Goldberg (1995). *Journal of Child Language* 25: 431-442.
19. Tomasello, M. 1998. Cognitive linguistics. In W. Bechtel & G. Graham, eds., *A Companion to Cognitive Science*. Blackwell.
20. Tomasello, M. 1998. Emulation learning and cultural learning. *Behavioral and Brain Sciences* 21: 703-704.
21. Carpenter, M., Nagell, K., Tomasello, M. 1998. Social Cognition, Joint Attention, and Communicative Competence from 9 to 15 Months of Age.

Monographs of the Society for Research in Child Development Vol. 255.

22. Tomasello, M. 2000. Do young children have adult syntactic competence? *Cognition* 74: 209-253.
23. Tomasello, M. 2002. Some facts about primate (including human) communication and social learning. In A. Cangelosi & D. Parisi, eds., *Simulating the Evolution of Language*. Springer-Verlag.
24. Tomasello, M. 2003. On the different origins of symbols and grammar. In M. H. Christiansen & S. Kirby, eds., *Language Evolution: The States of Art*. Oxford UP.

これらに、私は、著作番号8から、次の諸章を付け加えておきたい：

1. Usage-Based Linguistics; 2. Origins of Language; 8. Biological, Cultural, and Ontogenetic Processes; 9. Toward a Psychology of Language Acquisition.

以上の論文のタイトルからだけでも、彼が着実にかつ精力的に三つの枠組・三つの焦点に関連する研究を進めていることを読み取ってもらえることと思う。

5. トマセロの研究は、認知科学の第三世代に属する

中京大学教授・長滝祥司博士もマイケル・トマセロの研究に関心をもっている学者の一人である。

長滝氏は、昨年末、編著『現象学と二十一世紀の知』（ナカニシヤ出版）を出された。氏のトマセロの研究の特徴付けは、私には非常に興味深く、また、納得の行くものである。氏は、次のように述べている。（同書第2章「身体の認知現象学・序説」から）

身体の現象学と第三世代認知科学は、時期こそずれているとはいえ、類似した問題に直面してきた。したがって、そこに両者の協働の可能性を探っていくこともあながち無駄ではないであろう。以下では、その可能性について、最近の発達心理学（ここではトマセロを取り上げる）の成果をみながら考察してみたい。発達心理学を参照するのは、知覚や身体、表象や言語といった問題に取り組むさいにメルロ＝ポンティがとりわけ依拠したものだからであり、クラークやブルックスのような第三世代認知科学を代表する論客たちもたびたび言及する研究分野だ

からである。さらには、人間の認知のしくみを解明するには、その個体発生を踏まえることが必要だからである。また、進化論なども踏まえるトマセロの研究は第三世代認知科学に属するといっているであろう。(pp. 48-49)

私がこの記述に興味深く思ったのは、私が専ら言語研究との関わりで考えてきたトマセロの研究を、ほとんど私の視野に入っていなかった認知科学の展開の中に位置付けるといふ新しい見方を教えられたからである。また、納得したのは、J. Bruner (1990) *Acts of Meaning*. Harvard UP. (邦訳『意味の復権』ミネルヴァ書房)を読んでいて、1950年代後期に始まったいわゆる「認知革命」が当初の方向を見失ってどのように「裏切られて」行ったかの説明に出会ったばかりだったからである。ただし、ブルーナーは、「認知革命」が再生しつつあることをも指摘している。それがおそらく長滝氏の言う第三世代認知科学として勢いを増しつつあるのだと思われる。

ここは、いずれについても、これ以上詳しい扱いのできる場所ではない。関心をもった方は、それぞれの著作を手にとっていただきたい。

6. 彼の主著の一つの翻訳刊行について

最後に、偶然知った情報だが、トマセロの主著の一つである1999年の *The Cultural Origins of Human Cognition* 『人間認知の文化的起源』の翻訳が近いうちに出版されることを記しておきたい。

『心とことばの起源を探る』というタイトルで勁草書房から、今秋には出版されるとのことである。

この著書については、私は上で言ったように「トマセロのそれまでのすべての研究が流れ込み、その後のすべての研究が流れ出していく結節点のような位置を占めている」と見ている。一人でも多くの人に読まれることを期待したい。

(受理日 平成17年5月17日)